
人類最幸の麻帆良日記

洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類最幸の麻帆良日記

【Nコード】

N0863T

【作者名】

洸

【あらすじ】

人類最幸こと零崎^{ゼロザキ} 逝^{ユキシキ}識と妹、幸^{ユキオリ}織が兄とリアル鬼ごっこ中に誘拐され、投げ出され、とある学園で生活し始める。
殺人鬼でも暮らせるか？なんて感じのサバイバルごっこのお話。

ブログ飛ばして二日目（前書き）

勢いで書きました。

最近、人間関係シリーズを全部読みました。
自分的に呪い名が出てくるやつが好きです。

ブローグ飛ばして一日目

たとえば、

妹と共に兄から逃げようと必死に走ったり、

たとえば、

赤い人に拉致られたり、（妹と共に）

たとえば、

車から投げ出されたり、（妹も）

たとえば、

投げ出された場所が学園都市だったり、

そんな動物園のライオンのような経験したことあるだろうか。

そんな体験をしたのは！ワタクシ、人類最幸こと零崎^{ゼロザキ} 逝織^{ユキオリ}と、そ

の妹、零崎^{ゼロザキ} 幸織^{ユキオリ}にございます。

人類最強こと哀川^{アイカワ} ジュン 潤様の横暴によりこの場所にぱつんと二人ぱつ

ちなのですが。

「ここはどこかね？妹よ」

「わかる訳が無いのであります！」

「いい返事だ」

幸織は正直アホだ。ついでに血の繋がりはある。

現状、目の前にでつかい木がすすくと育っている。

これ切るの大変そうだな。

どうでもいいね。うん。

「ところで兄貴ー。聞いてもいいッスか？」

「奇遇だな。俺も聞きたいことがある」

「先に聞かせていただくッスよ」

幸織の視線はでっかい木の方向に視線が向いている。
ついでに俺もだが、見ているのは木ではない。
幸織が言葉を放つ。

「目の前にいる老人はぬらりひょんッスか？」
「俺も思った。さすがは俺の妹だな。同じ思考だとは」
「一応、血の繋がりがありませんからね」

笑いあつたが、そんな事している場合ではない。
個々がどこかも知らない上に、なぜここに連れ去られたのかが分からない。

とりあえず、

「あんたら、俺たちに何か用かい？」
「あんたら、俺ツチに何か用ッスか？」

幸織とセリフがかぶった。

顔を見合わせる。幸織は笑った。俺は溜め息吐いた。
ぬらりひょんに聞いてみる。

妖怪だからすぐ消えるんじゃないかと希望を持って言ってみる。

「それはワシ等の台詞なんじゃが」
「あれ？兄貴ー。妖怪つてしゃべれんスか？」
「知らね。化け猫だけど人に成りすましてるからしゃべれますみたいな？」

「《昼飯食いに牛丼屋へ、ただし食べるのは鶏の唐揚げ》みたいな
！」
「なんだそれ」
「どこかの誰かの真似ッス。気にしないでいいッスよ」

ちよつとだけ幸織のテンションが上がった。
意外と情緒不安定な妹君だ。
アホだから仕方ないと言えない。

「あー！わかった！潤さんツスよ！仕事押し付けられたツス！」
「何い！？レン兄ちゃんとリアル鬼ごっこ！in京都！は強制終了！？て言うかなぜわかった！？」
「2分前にメール着てたツス！たぶん投げ捨てられたときツス！」
「ケータイの確認しっかりしろよ！」

くそつもう追いかけられない。
リアル鬼ごっこで何日逃げ切れるか挑戦しようかと思っていたのに・
幸織のケータイのメールを読んでみる。

《親愛なるユツキーたちへ
ぬらりひょんから依頼されると思うから
よろしく　by潤》

メールを見終わってぬらりひょんを見る。
ぬらりひょん〓依頼者。
最強の「よろしく」との書き残し〓命令！？

「なっはっは。悪い悪い！依頼人だったか。てつきり幸織めあて
の変態かと思った」

「その思考、レンにーちゃんと同じツスよ。つまりH E N T A
I ツス」

「舞織に似てきたなーアホだけど」

「俺ツチそんなにヒデエ事言ってないツス！」

「なはは、このどアホめー」

「アホじゃないッス！アブノーマルなだけッス！」

アホの妹をいじるのは楽しい。レンに「ちゃんの変態がうつったか？
なんと哀れなのだろうか。」

そして我が妹もアホであることに気づいていないなんて。

「だからアホじゃないッスよ」

「幸織、おまえはいつ読心術を覚えたんだー？アハハ」

「思いつき声に出てたッスよー。ウフフ」

「・・・自重するか」

自分達の言動の気持ち悪さに吐き気がした。

妹とともに溜め息吐く日がこようとは。

アブノーマルで何が悪いと叫びたくなる。

「ふむ、お主たちが人類最強の請負人でいいんかの」

ぬらりひょんがアホな事言っているよ？

後頭部あんなに伸びているのに。

脳みそがたてに伸びてそうなのに。

ダチヨウと同じ脳みそなのか？

目玉以下www

「潤さんといつしよにするなし、あの人はもつと崇高で孤高の存在
なんだぞー？」

「天上天下唯我独尊って言葉は潤さんの為の言葉だと思っんッスよ」

「まあ俺達、請負人代理だけ」

「依頼をことごとく失敗or潰していくけど」

「むしろ迷惑ww」

楽しくなければ失敗。つまらなければぶっ潰す。

面白かったら成功。零崎出来たら最高。

そういう基準でやっているからあまり頼まれない。
今回面白いから頼まれたんだろうけど。

「要約すると請負人の代理で来たって事」

「ふっふむ、依頼を受けてくれるのじゃな？」

『さあ？知らない』

「ふお！？」

「つまらなかつたらどこか破壊していくから」

「楽しくなかつたら失敗させるから」

聞いてないし、受けるとは記載されてないし。

基準の問題とかあるし。

わからないし、頼まれただけだし、勝手にしてもいいのかわからないし、この際勝手にしてしまおうか。

「まあ、いいんじゃない？あの最強がこんな俺らに頼んだんだから」

俺達がなぜここにきたのか。

人類最強なら面白いものがあるからと言っただろう。
だったら問題ないだろうと。

そして数日後、俺達はこの選択に後悔した。

ブログ飛ばして二日目（後書き）

書き忘れがありました。

この小説は一ヶ月更新なのでよろしくお願いいたします。

ひとつ ふたつ（前書き）

マシンガントークってメンドクサイ。
書いた今言える。

PS、大幅に書き送れてごめんなさい。 + 2話みたいな感じになっ
てごめんなさい。
今回も変わらずgag gagです。

ひとつ ふたつ

右を見て、左見て、後ろを見て、前を見る。

女学生達が自転車もビックリな速さで学校に向かっている。

「なんてっかなー、あれッスね。

——傑作だ」

女学生の波の中心で幸織ユキオリがつぶやいた。

「幸織ちゃんがないんですけど!」

この学校の警備員になって数日。

退屈しない毎日を送っていたある日、

零崎幸織ゼロザキユキオリがいなくなっていた。

いつもはベッドの横でローリングしているあのアホの子が消えていたのだ。

すぐさま連絡したのは学園長こと、ぬらりひょんだった。

シスコンの逝識ユキシキは兄の【自殺志願マインドレンデル】に負けず劣らずのマシंगाント

ークで逝織ユキオリの事を連絡した。

「ぬらりひょん！聞いてくれないか！もちろん拒否権なんてものは無いよ！とにかく横槍無しに聞いてくれ！うちの可愛い可愛いキュートでアホの子の妹がいなくなっただよ！いつもならベッドの横でローリングしているはずなのに！いつもなら朝食作りながらナイフ投げて遊んでいるはずなのに！スツパツなんて外道なモノを全身全霊で否定しはいていないあの子が！俺の元から消えたんだよおお！　《その事な――》　ああああああ！――！一大事なんだ！これは台風や財政難、オイルショックなんかよりも一大事なんだよ！とにかく探して欲しいんだ！この学園は広すぎてあの子は迷ってしまうかもしれない！　《その事で――》　むしろ校内に入って学校の一部を破壊しているかもしれない！そんなことしたら俺が最強に怒られる！あの子はお茶目だから！でもお兄ちゃんは何でも許しちゃうよ！たとえロングスカートであれどパンチラサービスは欠かさない！ミニス力であれば必ずパンツは白！そんなところにもでサービスを欠かさないんだから！そんなあの子が俺のそばから離れていってしまったんだよおおおお！疚しい虫共が幸織ちゃんに手を出してしまうかもしれない！お兄ちゃんは心配だよおおおおおお！」

周りの目は怪訝な目になるでしょうね。こんなマシंगाントーク。しかし、逝識^{ユキシキ}は大真面目^{マインドレンデル}で言っている。

小さい頃から【自殺志願^{マインドレンデル}】に調教されていたのか。こういうところだけは似ている。

《その事で話したいのだが、もう良いじやろうか》

「幸織の事を知っているのかい！？じゃあ吐け！零から無限大まで知っている事全部吐け！」

《幸織ちゃんなら

――わしの学校に転入させたぞい》

しばし沈黙。

脳内に戦慄する。

数字わかるか？ 1（ワン）、2（ツー）、1（ワン）、2（ツー）
携帯握り締めていないか？ 問題ない、まだ画面は割れていない。
喉の調子は？ 万全だ。
息を吸え！この言葉は今しか出ない！

「ふざけんなあああああああああ！……！」

麻帆良の地に響いたそうだ。

幸織 s i b e

「ん？逝識兄の声が聞こえたようなー」

零崎幸織ちゃん麻帆良学園中等部2 - Aの教室前にいるッスよ。
語尾は私用ッス。

学園長の要請にて、いい年のおっさんとここまで来たッスよ。
1ヶ月もしたら担任が変わるらしいのに、めんどくさい事をするも
んッスね。

「先にどうぞ」
「どもッス」

そして俺ツチは勢いよくドアを開けた。
その後の行動は0・1秒間の戦いッス。

まずは右手に忍ばせていたナイフで黒板消しトラップを真っ二つに
します。

0・5秒

次に、ナイフを投げて、その先に仕掛けてあるトラップを全て解き
ます。

0・3秒

真っ二つになった黒板消しをうまくキャッチします。

0・7秒

合計1・5秒。

兄貴なら0・5秒で終わらせるんじゃないかと思う。

もし、上にあるのが黒板消しでは無く、凶器の入ったバケツだった
ら。

間違いない死に掛けていただろう。
後ろのおっさんが。

にしても、

「なんなんツスかね。新手のいじめツスか？こんな歓迎のされ方は初めてツスよ」

先にあつたトラップの後を踏みにじり、教卓まで歩いてナイフを回収する。

真つ二つになつた黒板消しを黒板の下において振り向く。

「何してんツスか。教師ならさっさと入って来いツスよ」
「え？ああ」

多忙で奇怪で愉快な学校生活の始まりがコレだった。

ひとつ ふたつ（後書き）

一ヶ月後、書けるであろうか。

テスト週間が終わって、Bダッシュで書きましたけど、

今度は地域の行事が・・・！

しかし、書くつもりですので、ゆっくり待ってください。

みつつ

麻帆良学園、学園長室にて、彼は笑顔で座っていた。
ソファに座り、足を組んで座っている。

笑っている。とても爽やかな笑顔で笑っている。

しかし目が笑っていない。

漂うオーラも不穏なものだ。

無言＋笑顔＋不穏なオーラ

まさに腹黒キアラのようだ。

頭が無駄に長い学園長に向かって放たれている殺気は冗談半分のも
のだがとてもない。

逝識はあくまで笑顔のまま言った。

「何か言うことはないかね？学園長？」

いつもならぬらりひょんと呼ぶのだが、今回は違った。

親愛なる妹が誰の許可も確認も得ずに行動させたのだ。

何をするかもわからないのに。

そのうえ、大事な妹に何されるかわかったものではない。

学園長としての責任を負わせようとしているのだ。

「いや、しかしのう。夜だけじゃつまらんじやろっ」

言い訳しようと言葉を放つが、逝識に何を言っても通じない状態だ。
一定のことを除いて。

「よくそんな事が言えたものだ。己の学園が壊されたくないから通
わせなかったのに。

いまさら心変わりとはね。あえて言うなら笑止、と言おうか」

変装のためにかけたメガネの奥でぬらりひょんを睨む。

今の格好は教師を思わせるようにスーツとメガネで着ている。

男子学生として行ったら逆にアウトだ。

学園長室は女学生専用のところにある。教師でなければ入れないだろう。

「じゃがのゝ近々新任の先生が来るのじゃよ。あの子にバックアップを任せたい」

「ハハッ、それこそ笑止。

幸織は零崎だぞ？甘く見てもらっちゃ困る。間違えて解体されるぞ？俺だってあの子に解体されかけたことがある。死にはしなかったがね。

だからといって自分たちも解体されないと思ったら大間違いだぞ？魔法使い？」

ピキインと空気が変わった。

その言葉を出すまで白を切るつもりだったのだろう。

魔法使い。人類最強によつて魔法世界とやらの放り出されたことがある。

魔法は習得しなかった。できるとしたら相手の魔法を弾くだけだ。そのとき、妹は居なかったが。

「俺達を見くびりすぎたな？近衛近右衛門。

確かにお前からから見れば俺達は凡人に見えるだろう。何も知らない一般人に見えるだろう。

だがな！わかる奴にはわかるんだよ！ここの不自然さとかよ！

誰も気づかないと思っていたのならはつきり言おう。うぬぼれるな。恥を知れ。

俺が気づいてるのは魔法世界とやらの言ったことがあるからだけど

な。こんなところでまた見るとは思わなかったぜ、腹立たしい。

まったくよー！お前ら本当馬鹿じゃないのかー？わかつちまった奴の事も考えやがれてんだ。

そいつがここの学生だとしたら親に言っても麻帆良だからで終わらせられ、最悪の場合、精神科に送られるんだぞ？お先人生真つ暗だ！笑えねえぜ！」

どんなに空気が凍り付こうと逝識は喋るのを止めなかった。
なれた様にマシンガントークを始める。

今回もまじめに言っている。内容も前よりずっとまともだ。

「まあ、そうであろうと俺にとっちゃどうでもいい。
いいか！よく聞け！俺が今思っているのは幸織ちゃんの制服姿をな
ぜ俺に見せなかったという事だ！」

効果音にドオオオオンとでもつきそうな勢いで言った。

ぬらりひよんの目は点になっていた。つぶらな瞳だぜ、バーニング。
さっきまでのまともな話がどうやったらここまで丸潰れにできるだ
ろうか。

これが逝識クオリティ。恐るべし。

「俺はな！幸織ちゃんの制服姿を一番最初に見たかったんだよ！悲
願だったんだよ！それをよくも無慈悲に潰してくれたな！今現在で
も見てないんだぞ！幸織ちゃんの制服姿！見に行きたいけどわから
ないし、どうせ女子校にでも入れたんだろ！？入れねえよ！害虫と
か引つ付かなくていいけども！俺が見れないとはどういう用件か？
嫌がらせか！？いやみか！？新手のいじめかあ！？喧嘩なら十倍で
買ってやるぜ！ただしデスマッチみたいなあ！？とにかく何でもい
いから幸織ちゃんの制服姿を見せろお！」

発狂でもしそうな勢いだ。しかし本人めちやくちや大真面目です。
天性のシスコンです。笑ってやってください。
今だ学園長は目を白黒させていたそう。

みつつ（後書き）

あるえゝ。逝識くんがすごいシスコンキャラになっちまった。

最初はおつとお兄ちゃんキャラにしようと思ったのに。

まあいいか。

いい言葉だ。まあいいか。

よーっつ

その頃、2 - A 教室にて、

「キサキユキオリ木崎幸織でッス。仲良くしてくれる人だけよろしくッス」

幸織ちゃんは兄が暴走している中、暢気なものだった。

表の名前は木崎。小さい頃、よくお妃様なんて呼ばれたと思いながらも名乗った。

指定された席に座り、授業一発目から寝ようと机に頭を乗つけた。

「なぜ貴様がここに居る？ 斬殺者」

隣から声が聞こえた。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

ダーク・エヴァンジェル

闇の福音、不死の魔法使い。殺人鬼もびっくりな二つ名の吸血鬼さんですね。わかります。不死の魔法使ってwww永遠の魔女っ子！。エヴァの場合は永遠のロリか。

「その言葉、そっくりそのまま返しまッス。なんて。

まさかここに居るとは思わなかったッスよー。吸血鬼の真祖？ にひ

ハイ・デイルイトウォーカー

ひ」

悪戯っぽく笑い、起き上がる。授業はすでに始まっている。そんな中小声ながらも話している。

幸織が魔法を使えたとしたら話す事無く魔法で話していた事だろう。しかし、そこまでそこまで万能ちゃんではない。

逝識と魔法世界に行つてないため、魔法というものをよく知っていない。教えられても使おうとは考えないだろう。

知識だけ。口調は馬鹿のように思えるだろう。だが、これでもER3にいた子だ。哀川氏の無茶振りであつちにこつちに動き回つたため、そこらにいる学者より頭はいいだろう。

「貴様も知ってるだろう。二度も言わせる気か？」

ついでに、幸織ちゃんは一度エヴァと戦ったことがある。

魔法使いVS殺人鬼。勝敗は決まっていらないが、それは戦争に近い状態だった。

「べつつにー？もう一回言ってくれるなら、もう一回聞くッスけど？」

ペン回しを始めながらニヤニヤと笑い、授業を進めている高畑を見る。

退屈な授業に妨害を。邪念を込めてペンをダーツの矢のように持つて狙いを定める。

「俺ッチはぬらりひょんに頼まれただけッスよ？何かとは言わないけどもー」

「それはそれで気になるな」

「なあに、すぐにわかるッスよー。ついでに言つときますけどー」

いすを音も無く下げ、曲弦系で壊さないように扉を開ける。

0・1秒の戦いを始めるかのように静かな状態で準備を進めた。準備が整った。しかし、会話が止まっていた。

「なんだ？もつたいぶらずに言え」

にやっと笑って、いすから離れ、ペンを高畑の頭の横を狙って飛ば

す。瞬間、扉のほうに走り、通り過ぎる直前、小声で言った。

「斬殺鬼じゃなくて俺ツチは殺人鬼だぜ？キティちゃん♪」
「なっ！」

ガッン

エヴァが反応した直後、高畑の頭のすぐ横にペンが刺さった。黒板に亀裂が入り、ペンからインクが流れていた。

高畑は冷や汗流しながら後ろを向く。そこには殺気を散らし、体を振るわせるエヴァと、

ガタン

倒れた椅子しかなかった。

その頃、女子中等部前。逝識君は、

「あー、授業はじまってんのかね、畜生。窓からダイナミックに登場しようと思ったのに」

わざわざ外に出て窓から突入しようと考え出していた。
片手に曲弦系。窓を割ってから入ろうとしていた。

「まあいいか。どこから入ろうかな。タカミチか、瀬流彦か・・・」

冷やかしに行くような感じで。かわいそうな事に被害にあう人は決まっているらしい。

メガネとYシャツ（上着脱いだ）姿で、身長の所為か教師に見える。きよろきよろと目を動かして窓の奥を見る。

「お！あれタカミチじゃねえ？タカミチだ。おっしや、逝ってみようか」

壁を登る。若干違うところの窓を見て瀬流彦がいたから、頭の上に時計を落としていったのはちよつとした嫌がらせだ。そして、登りきったら

ガシャーン！

「うおおおっす！タカミチィ！老けてるか！」

窓を割って登場。ダイナミック！しかし決め台詞が超微妙！

「・・・何のようだい？逝識君」

チヨークを握ったまま硬直しているタカミチにカミングアウト！

「俺の愛しの愛しの幸織ちゃんが女子中生だつてよ！制服姿が見たくて爆走しちゃったぜ！ヒヤッハー！」

「とりあえず落ち着いてください（なんだ？このテンションの高さは）」

チヨークを置いてポケットに手を入れた。それを見て曲弦系で動きを止めたのは言うまでも無い。

「まったく野蛮だな。俺は幸織ちゃんの様子を見に着ただけだぞ？
冗談半分で冷やかに来たのもあるけど」

メガネを頭の上に移動させる。勾宮の出夢のような感じで。
腕を組みながらも右の指は動かさない。動かして失敗すれば八つ裂
きになりかねない。

腕はいくら動かしても変わらないが。

「とりあえずさ、ここ何組？幸織ちゃんは？」

ため息吐きながらも目を閉じるタカミチ。
それに答え、曲弦系を解く。

「ここは2・Aです。
幸織さんは逃げ出しました」

一瞬硬直した。我に返って頭を数回たたき、頬をひっぱる。
そして耳を傾ける。

「あんだってー？ワンモアー」
「幸織さんは逃げ出しました」

バキン

黒板に刺さっていたペンが突然割れた。
インクがあたりに散る。

頭に乗っているメガネはレンズにヒビが入っている。
タカミチは冷や汗をかき、逝識は笑顔ながらも真っ黒いオーラを流
して言った。

「ちょっとOHANASSIしよつか」

まさに死刑宣告であつた。

よーつつ(後書き)

気が乗って書きちまったZ E。
最近読むほうが多いよ。小説。
どこもかしこもはんぱないね！

いつつ！（前書き）

たいへんだあ。

誰でもいいから聞いてくれ。

最近、寝不足のせいで立ちくらみが激しいんだ。

風呂場なんかでぶっ倒れそう。怖いんですけど、ちよつとどろじやないんですけど。

だから何？って話だけどね。ハハッ

いつつ！

退屈な授業に妨害を。

さすが兄妹、考えていることが同じだ。

担任を教室から連れ出して武力行使、酷いものだ。一般的には。タカミチをおいて、何を思ったか、2 - Aの教室に入る。

「という事で女子中学生諸君は楽しい自習をしているがいい。

なあに、タカミチは俺とお話があるから授業できないだけであつて、別に俺の自分勝手に殺して解体して並べて揃えて晒されたわけではないから安心してくれたまえ。

ついでにこのような事態になったのは学園長ことぬらりひょんが俺に無断で幸織ちゃんを入学させたからだ。幸織ちゃんは学校に行く必要がないくらいの学力はあるのだがね、まったく。

まあ、俺が言いたいのはタカミチは忙しい、自習してろ。諸悪の原因はぬらりひょんだ。以上だ。

全員青春したまへよ！春の嵐が来ることを祈っている！」

全力でおかしいがここはスルー。

教室に出た瞬間タカミチ氏の残骸と共に女子校の廊下から消えた。窓の外からさわやかな風が吹いていたとき。

零崎さんちのお嬢さん

あほ毛の目立つ茶髪と、これでもかと言わんばかりに光らせた瞳。視線は馬鹿でかい木に向かっていた。

「何ッスかこれ！すご！？スケールが半端ないッス！素敵過ぎる！」

木をバシバシと叩いて上を見る。

じっと幹を見て枝の位置をみる。

木からバツクで離れて、じいーっと木を見る。

風の音、木の葉が囁くようにざわざわと音を立てる。幸織は動かない、ただ木を見ている。

風が止んだ。木の葉の音が小さくなる。

1 , 2 , 3

音が止んだと同時に弾かれるように木に向かって全力疾走する幸織。木の幹に足をつけ、重力に逆らいながら上へ上へと駆け上がる。

「・・・っあ！」

足を滑らせ木から足が離れる。

このパターン、悪いパターンだ。悪くないなんて言えない。

頭から落ちるパターンです。はい。

登校初日に怪我をしたなんて笑えない。

何よりもタカミチ何ぞに笑われて堪るか。

右手にナイフを持って木に突き立てる。

「とつまれー！」

少し距離があつた所為か木に激突する。

だんだん速度が落ちて、止まった。

「イテエ。主に脇とか、腕とか、それでこの状況。オワター」

今の状況を説明しよう！

でっかい木にナイフ刺してぶら下がってる。高さは2階建ての一軒家くらい。降りようと思えば降りれる。

脇、腕、外傷アリ。腕がだんだん弱ってきている。

そんなところだろう。

だがしかし、ナイフは放さない。腕が震えても放す気はさらさら無い。

運悪く、使ったナイフが大切な物の一つだった。

足で木を押し、ナイフを取ろうとする。

少しだけゆるくなった気がした。

「っもうちょっと！」

力を入れてナイフを木から抜いた。

後は着地だが

「・・・なんだと」

足元を見て驚愕、ただいま呆然みたいになった。

零崎さんちの変人くん

なんというか、何と言つべきか、

とりあえず、何と言つことをしてくれたのでしよう。とても言おう

か。

妹の気配に近づいて前後左右上下見たんだ。

「タカミチ、タカミチ、老け顔のタカミチ」

「なんですか」

逝識はタカミチの後ろの襟をつかんで引きずる形で上を見た。
タカミチは冷や汗流しながら上を見ていた。

「マホーって秘匿じゃなかったっけ」

「それは僕が聞きたいところです」

彼らの視線は上を向いていた。

巨大な木に向いていた。否、

結構上のほう、木の幹の側でオレンジ色の魔法陣に向いていた。
魔法陣を不思議そうにナイフで突く逝識の妹に向いていた。

「何と云うことでしょう」

「同じようなこと二度も言わないでください」

妹が魔法を知ってしまった。

愛しい愛しい妹が兵器を手にしてしまった。

どうしようか。妹がぬらりひよんに利用されてしまう。

「あああああああ！どうしよう。大変なことになってしまった！
た！

幸織ちゃんが・・・幸織ちゃんがぬらりひよんに穢されてしまうっ
うううううう！」

「えっと、落ち着いてください、逝識くん」

「だめだ、ぬらりひよんなんぞに幸織ちゃんを渡して堪るか。零崎

能天気だなとも思いながら、ここから先を考える。

ぬらりひょんが幸織のことを知ったら己の方へ取り込もうとするだろう。

どうやってでも阻止せねば。

.....

いや、もうドウでもよくね？ だるくなってきた。

向こうさんが勝手にやればいいじゃない。

どうでもいいじゃない。

責任は向こうさんが取ってくれるんでしょ？ 万事オツケー。

「兄貴ー？」

だいたい何を血迷っているんだ。この子は強い子だぞ？

何を着ても天使 Ⅱ セーふくそおゝび！ 最終兵器天使完成！

何の問題も無い。むしろ良い。

完璧じゃないか！ 幸織ちゃんの天使度が上がるだけ！ めちゃくちゃ良いじゃないか！

「あゝにきゝ」

しかし、悪い虫がついたらどうする？ 幸織ちゃんは純粹だ。

強い子だが、それ以前にアホの子だ。下手したら騙されるかもしれない。

そのときは排除すればいいが幸織ちゃんに嫌われたら？

なんということだ……。天は味方になってくれないのかあ！？

「それなら教員になればいいんじゃないツスカ？」

「それだあ！ ってあれ？ 幸織ちゃん、読心術なんていつ覚えたんだい？」

「思いつきり口に出てたツスよー」

なん・・・だと・・・？

最近よく口に出るな。気をつけなければ。

さて、決行は何時にするか。

「それより兄貴ー。さっきから俺ツチのケータイが半端ないんですけど。

何度も電話されてるんツスけど。

無視し続けていいツスカね」

「誰からだい？」

「UMAと間違えるくらいの後頭部を持つ生物、通称——」

「ぬらりひょんか。よし、俺が許す。着拒しろ」

「Yes sir！」

ケータイを取り出し操作しようとした。

はい、過去形。

操作できませんでした。

バンツ

「・・・え」

目を丸くして己の手を見る幸織。

同じく目を丸くして幸織を見る。

彼女の手元はバラバラになった破片。破片で傷ついた手。流れる血。焼け焦げたストラップ。

もうお気づきの方も居るだろう。

ケータイが爆発しました。

「・・・なにそれ、こわい」

空気と化したタカミチと呆然とした幸織、
静寂を破るように、振り絞っていった言葉がそれだった。

いつつ！（後書き）

小説の資料としてとある本を買ったんだ。

《世界の「神獣・モンスター」がよくわかる本》

傍から見たらイタイ人。他にも欲しいのがあったんだけどね。トホホ・・・

むっつ

学園長室なう。

「あんまりだと思わないかなあ。

今月の払ったばかりなんだけどなあ。

ふざけてんのかなあ。

どう思う？ 諸悪の根源の人外さんよあ」

あつありのままに起こった事を話すぜ！ なんて大げさなことじゃないけど、

ただいま幸織ちゃんが天使のような笑顔でぬらりひょんとお話しています。

まだローマ字じゃないよ？ まだ。

「気に入ってたストラップだったのになあ。

めちゃくちゃがんばって探した代物だったのになあ。

足が棒になるくらい歩いて見つけたものだっただけどなあ。

兄さん達に貰った物もあったのになあ。

ねえ、どうしてくれるの？ テメエが電話かけすぎた所為で爆発したんだけど。

アタシの苦労とか兄さん達からの宝をどうしてくれるわけ？

買いなおすなんて言ったらその四肢を胴体から100km以上離した後頭部を切除して柳の木に吊り下げる」

幸織ちゃんマジギレモードですね。語尾変わってます。

おお怖い怖い。もっとやれ。

ってかさ。爆発するほど電話するとか。どんだけー。

古いね。わかるよ。しかし止めない。

妹の暴走は止めるけど。

「幸織ちゃんよ。お兄ちゃんはそろそろ飽きたからいうけど」

「あゝん」

「ストラップだけは修復したよ?」

ストップする妹。FFの魔法じゃないんだぜ。

言い間違いなんか起こしてないんだぜ。

妹よ。その自然に出る両手は何だ。自然と渡したくなるじゃないか。おつと手が滑って渡してしまった。

「・・・傷ひとつ無い」

「俺、現代においてハイスpekなファミコンだから」

「それって古いけどすごいってことツスカ?」

元に戻りました。本調子じゃないけど。

いつものように元気な子じゃなくて冷静だけどよく分からない子になってるけど。

問題ないでしょう。

ストラップをポケットに入れてぬらりひょんに向けて笑顔で言った。

「前言撤回しまッスー。買いなおし、毎月の料金の支払いでいいッスよ。」

本当はそんなに許したくないんですけどー兄貴がこの状況に飽きたらしいんでねー。

携帯の色は白でお願いしまッスー。んじゃ、帰るッス」

早足で学園長室を出た幸織。

しかし、見れば見るほどシニール。

半壊どころか、粉碎された扉。

唯一の残骸と言える金具は傷ひとつ無く転がっている。
それ以外は大量の砂、に見える木の屑だ。

「これは買い直しか。愉快だな」

ぬらりひよんに向かって言う。

ぬらりひよんの机もびっくりだ。

穴が開いてるぜ。足形なんて誰が予想できただろうか。

「お主の妹の所為なんじゃがのう」

ハハッ ミツキーも乾いた笑いから苦笑に変わるぜえ

こーの老害め

「お前のしつこい電話の所為だろうが」

馬や鹿みたいな事言ってんじゃねえよ？馬と鹿の方が頭いいかーw
ww

まーったく、その無駄に長い脳みそはどうなってるんだ？い？
脳みそに皺が無いのかねえ？飾りなら俺が切り取ってやるよ？」

あくまで！笑顔で！爽やかに！

ナイフを片手に言う。

ほとんど勢いだけ。

さあ、逝ってみよう！って感じで！

「まっ待て！確かにそれは悪かった！じゃがストラップくらいであ
んな——」

ガン

学園長の言葉は遮られる。

他の誰でもない彼に遮られる。

片手のナイフは机に向かっていた。

あくまでも笑顔。否、ギリギリ笑顔と言ったところか。

人が変わったかのように彼の雰囲気が変わる。

「おいおいおい。テメエ馬鹿な事言うんじゃないよ？

テメエの価値観なんぞ聞いてないし、

テメエの考察なんぞ聞いてないし、

テメエの言い訳なんぞ聞いてないから。

俺さー。これでも頑張ってるぜえ？感情がままに蹂躪するの。

なーのにテメエはよおー、うざってえ言い訳してー、言いくるめようと騙し騙して、自分の良いように俺達使ってよお。

何なの？殺されたいの？俺達に殺されたいの？

俺は構わないんだぜえ？この学園がぐちゃぐちゃになっても、バラバラになってもよおー。

わざわざ妹の暴走止めてやったのに、まるで己は悪くないとばかりに。

結構俺も怒ってたんだよおー。いーや、狂っちゃってるー？ヒハハハ！それも悪くねえ！」

一人で暴走し始める逝識。

いつものような変人ではない。いつもとは似ても似つかない。

左目はどこを見ているか分からない。右目は学園長に向いている。

「アレさー！死んだ兄さん達からの贈り物なんだよなー！しかも最後の！俺たちにとつちゃ、さいっこうにアンハッピーな事でさいってーにハッピーな物なんだよ！

それをまるでどこにでもあるかのように！ヒハハ！形は同じものがあるなあ！いくらでも！

でも俺たちにとっちゃ掛け替えの無いだいつじな物なんだよぉ！
メエらに言っても分からだろおがよぉ！

あーあーあーあぁー！がんばっちゃったぜ、俺。でももー無理！俺
は零崎だぜえ！？殺人しねえと死んじまうんだよぉ！」

机を壊して書類で目暗ましする。

「待て！待つのじゃ！くっ」

学園長は立ち上がり電話をとり、連絡をとる。

「わしじゃ！至急零崎君達を抑えるのじゃ！死人が出る前に見つけ
出すのじゃ！」

学園長は床に散らばった書類を放置して部屋を出た。

校内を出て少し歩き上空や地上からでも見にくい場所
自分と同じくらいの大きさのシャベルを担いで歩く逝識。
木の陰から逝識を待っていたかのように出てくる幸織。

「やっぱ暴れる？一人では暴れさせないっしょ」

「ヒハハハ！良いじゃねえか！魔法使いと紛争だ！どうせ殺しても
結界がある！久々に呼吸でもしようじゃねえか！」

「ナハハハハ！そーこないとダメっしょ！」

奥に笑い会う女子高生。聖ウルスラ女子の制服を着て笑いあっていた。
た。

不気味に笑って逝識と幸織は彼女らに近づいた。

逝識はシャベル。幸織は自分の全長より大きい目の金槌のような釘。

「んじゃー、零崎でも始めようじゃねえか」

「んじゃー、零崎でもはじめちゃおっかな」

殺人鬼は嗤った。

むっつ（後書き）

絵でも描きたくなった。零崎兄妹の。

描いた後思ったよ。誰だw

下手さにもう萎えてきた。

まあ何が言いたかったかというところ、想像と妄想でどうにかしてっちゃって話。

なにこれ、自分キモイwwwwww

文を見直してみた。1行で泣きそうになったわー。

ナニコレ、微妙。最高にアンハッピーで、最低にハッピーで、どっちゃねん！

まあいいか、表現自由。ばんざい。

七つ（前書き）

ゲームしてたんだ。
ぶっつけ本番なんだ。
下書き無しなんだ。

七つ

《緊急事態発生、緊急事態発生、学生は直ちに避難。くりかえす、学生は直ちに――》

学園内に響く警報。主に彼らの居たところを中心に3キロ圏内になり響いた。

学生たちは走って指示に従った。

「なんか変なところから鳴ってるよ？何がしたいんだろ」

「被害者を減らしたいんじゃない？無駄に終わるんだけど」
『それはともかく』

前方、あるいは上を見て言う。

恨めしそうな顔をして、楽しそうな顔して言う。

『なんか用かい？せーぎの魔法使い？』

幸織から少しばかり殺気が漏れている。

逝識は軽蔑した視線を送る。

正義の魔法使い　と呼ばれた者達が彼らに敵意を向ける。

「行方不明になったと思えば旧世界にいたとは・・・だが、もう逃げられまい。

覚悟しろ！　地獄創り　！ここがお前らの墓場だ！」

自分が殺すものと勘違いしているようだ。

馬鹿らしい。さすが正義の魔法使い！脳みそ腐ってやがる！

「憎たらしい、妬ましい、恨めしい。

あんた達は何度あたしらを殺せば気が済むわけ？

2回死んで一個眼をあげたじゃん。

まだ気が済まないの？何様？ああ、正義の魔法使い様か。

いいご身分ですねえ？ナハハ、所詮戯言^{タワゴト}だけど」

五寸釘を両手に。正しくは、左手は巨大釘を担ぎ、右手は普通の五寸釘を数本持つ。

逝識は変わらず、シャベルを片手に笑うだけ。

「訳のわからないことを！死ねえ！

光の精霊11柱。集い来たりて「敵を射て」『魔法の射手・連弾・光の11矢』！！！」

魔法使い達は魔法で戦い始める。

彼らは避ける様子は無い。ただじっと見てるだけ。

「スネーク風に言つつしょ」

「シヨータイムだ」

そして矢は着弾した。

魔法使いたちはフラグを回収する。

「やったか！？」

この場合、ほとんどやってないんだな。

これじゃあまるで殺してチョーダイなんて言ってるようなものだよ。

「掟も 戒律も 理由さえも不在の儘^{まま}無謀な議論のみが 聳^{そび}え立つ」

幸織は言った。

魔法使いは声が聞こえて首を動かし、幸織を探そうとする。しかし、一部は見つけ出せなかった。

上空から降ってきた巨大な五寸釘。

誰もが聞いた、否、聞こえた声。

幸織は上に居た。まだ飛んでいる。

「不測の事態は 無粋に訪れ

醜悪な物語は生れ墮ち

我が内より 禍は流れ出す」

そういつて右手の釘を投げる。

釘は一部、当たらなかった。つまり一部命中した。

幸織は巨大釘の上に着地する。

「何時に為れば 解するのだろうか？」

見下していった。

リーダーと思われる男は逃げようと試みた。

しかし、振り返れば逝識がいた。

無表情で心そこにあらず、と言ったように何も映してない。

しかし、確実に殺していく。

「只の一つも糧に出来ず

さあ飢え 朽ちてゆけ

真理に在り処を妄信し

？望の果てに 倒れ朽ちてゆけ」

男のすぐ傍に居た幸織は笑ったままだった。

空で鳥が鳴いたような気がした。

「けして殺してはならん。気絶だけなら許す。どうにかしてでも止めるのだ」

世界樹の前に数人の魔法使い、術士たちが集まる。
零崎兄妹を止める為に集まれた力のあるものたちだった。

「最悪の場合、呪いを使ってもいい。しかし、絶対殺してはならん。良いな！」

『はい！！！！』

全員気合を入れている。

そして、話が終わり、皆散っていった。

「あーあ、こいつは派手にやり過ぎた」

血の付いたシャベルを片手に言った。

周りは木ばかりだが、血で赤く見える。葉の色も同じく赤。幸織は釘を背もたれに眠っている。

「久しぶりだったもんな。疲れて寝ちまうのも無理はないか」

愛しそうに幸織の頭をなで、笑う。

しばらく寝顔を眺めていたが、立ち上がり振り返る。

「まーだ、安心できそうにないな。まだ俺らを殺すか？魔法使い。だが、今この現状で手加減も即殺もできねえ。苦しんで死ぬことしかできない。」

できるなら引き返してまた今度、ってしたいが。どうする？自称正義。

それでも俺は戦えるぞ？殺し合いしかできねえけど」

シャベルを杖のように使い、立ち上がる。

逝識は幸織と違う。幸織のように人類最幸ではないから魔法攻撃をかなり受けている。

敵に目をつけられやすかった。それだけだが。

敵に言ってみたが、引き返す様子はない。

「じゃあねえ。ちいとばかり、無理しようかね」

第2ラウンド、開始。

なんだこれは。

零崎逝識、なんだあいつは！

魔法をいくら使っても弾かれ、受けても効いていないかのように！
零崎は化け物だったのか！？

「逃げるなら追わねえ。残った奴は死ぬ気で来い！」

逃げる者もたくさん居たが、残っていた者のほうが多かったはずだ！
もう100人ほどこしか居ない！？
何なんだ。夢であってほしいと願った。

「加勢しよう」

「助かる！」

誰かわからない黒服の男が加勢した。

彼は耳元で言った。

「彼は妹に弱い。近くににいるから、利用してはどうだ？」

それを聞いて行動した。

零崎が男に気を取られているうちに妹と思われる女に近寄る。

早く、早く！急げ！

そして人質にとった。

「とまれえ！こいつの命が惜しければ！」

正義がやる事ではないとわかっているが、こうでもしないとこいつ
は野放しにされたままだ！

どうにか捕まえなければ！我々に明日はない！

奴は動きを止めた。

これでいいは捕まえた！これで帰れる！

やつと終わると、まわりの魔法使いたちも顔が緩んでいる。もちろん私もだ。

「のせ」

奴は小声ながらも言った。

しかし、何を言っているのかわからなかった。

瞬間、奴はこっちを向いた。

「その汚い手を離せええええええええ」

奴は叫んだ。否、咆哮に近いだろう。気づけばこっちに向かつてくる。

しかし、さっきの叫びに皆怯んで動けなかった。

そして無理やり女と引き離され、押し倒された。

右手のシャベルが振り下ろされる瞬間のやつ顔は、激怒と言うより、狂っているようだった。

片手に妹を抱えて応戦する。

もう何も考えちゃ居ない。

妹を守る。ただそれだけのために動いていた。

離れていたらさっきのように殺されかける。

これは下種の集まりだ。幸織を奪われて堪るか。

近寄るものから殺せ。

敵視するものを殺せ。

考えているのも殺せ。

寄せるな。この状態では帰れない。早く、早く全滅させなければ――

「少し落ち着きなさい」

その声を聞いて首に衝撃が走り、気を失った。

七つ（後書き）

疲れた。

グダグダだったら書き直します。
眠い。

八つ

「ハーメルンの笛吹き男……。
よく読もうと思ったわね……。」

緑色の髪に紫のバラの付いた黒いオペラハット。赤い和風ゴスロリをきた女性が言った。

「おもしろいよ?」

「これどんなさいみん?ししょーできる?」

小さい頃の僕らが絵本を見て女性に言う。
ため息ついて近くにより、座る。

「催眠じゃないからね。ハーメルンの笛吹き……。
この話のモデルはなんだったかしら。」

仮説だけどウィリアム・マンチエスターの『炎のみに照らされた世界』では、笛吹き男は精神異常の小児性愛者だったってあったわね。ロバート・バートンによる1621年の記述に基づいてはマンチエスターはこの事件が起こったのは1484年の6月20日で、この犯罪者はハーメルンのザクセン人の村から130人の児童を誘拐し、「口に出して言うのも憚られる目的」に用いたと断言していたし、マンチエスターは「ある子供達は二度と姿を見せず、ある子供たちは五体バラバラにされて、森の繁みの中や木の枝から吊り下がっている所を発見された」と付け加えられてたとか」

「え?なにそれ」

「あれ?ながびきそうなよかん」

「いくつかの説では、子供たちは何らかの自然的要因により死亡したのであり、笛吹き男は死神の象徴であつたとされていたり、子供達は東ヨーロッパの植民地で彼ら自身の村を創建するために、自らの意思で両親とハーメルン市を見捨て去つたとされていたり、この時代に創建された幾つかのヨーロッパの村と都市は、ハーメルンの子供達による開拓者としての努力の結果であると考えられているとか。」

植民説は13世紀のドイツ地域はあまりにも多くの人口を抱え込んでいたため、長男のみが土地と権力のすべてを相続し、他の者は農奴となるしかなかったとの考え方に基づいている後に黒死病がこの不均衡を破壊らしいわよ」

俺達が目をきらきらさせて女性に聞いた。

「ごくしびよーって？」

「どんなびよーき？」

女性は笑って言った。

「お肌が真っ黒になつて死ぬ病氣よ。
まあ、貴方達がなることはないから」

俺らは疑問もなく、そのままを受け入れた。
絵本を閉じて上を向く。

「つぎ、なによむ？」

「残念。絵本はオシマイ。」ご飯食べましょ」

「めしー！」

妹が走つてご飯の下に駆けつける。

女性は俺を見て言った。

「■■■。さっきの絵本。どう思った？」

「うそついたらだいじなものがなくなる？ていうか、あれ《禁書》グリモワールでしょ？」

よくあんなふうにかくしたね」

苦笑して彼女は俺から絵本を取り上げる。

舌を出して絵本を少し掲げる。

「ばれたか。でも、まあいいでしょ？アレが読まれても二度と発生する事は無くなる。」

それも含めて音読していたんだろうし、流石としか言えない」

「ししょーはだいいいをみただけでふういんすることできるくせに」

「それはアタシが化け物だからよ。」

でも、滑稽な話と思わない？」

「なにがー？」

女性は絵本を空に放り投げた。

「こんな化け物、脅威にしかないのに、魔法使いは私を操ろうとしているのよ？」

アンデットマシンガン
この《どうにも出来ない怪異》を玩具にしようとしてるのよ？
面白いよね、簡単に釣れるのに。無駄にお金を使いすぎなのよ」

俺は首をかしげて彼女に聞いた。

「ししょーはなにでつれるの？」

瞬間、周りの景色がぐにやりと曲がり、空と地面がぐちゃぐちゃに

なつた中、彼女は形が変わらず綺麗に笑った。

「誰もが望んで、誰もが望まないもの。そして自慢の弟子達かしら？」

その一角だけ、綺麗に写っている。その周りは歪で、入り組んで、曲がって、切れて、千切れて、それでも安定されていた。彼女は手を耳の横に上げて、指を鳴らした。

昔の夢を見た。

とても幸せで居られた幼少時代。過ぎ去っていった過去。

起き上がって周りを見渡し、ため息をついて顔の半分の手を置いた。今の自分は上は何も着ていない。腹部の包帯、少し前の戦闘でついたものだろう。

「来るなら来るって連絡しろよ。師匠」

緑色の髪に紫のバラの付いた黒いオペラハット。赤い和風ゴスロリをきた女性が笑って逝識を見ていた。クスクスと愉快そうに笑い、絵本を閉じた。

「ビックリさせたかったのよ。でも大騒動でそれもできなくなったわ。

愛弟子たちがピンチな上、大暴走してるんだから」

「申し訳在りませんでした」

呆れ顔のまま棒読みで謝罪する。
それでもクスクスと笑う。

「まあ釣られた私も私なんだけどね」

「まったく、簡単に丸められて」

「まあ、別の目的もあるんだけどね」

オペラハットを手に持ち、その中に絵本を入れた。

大きさはまったく合っていない。

入るはずが無いのに当たり前のように入れた。

そしてその中に手をいれ、黒いファイルを取り出す。

逝識は眉間に皺を寄せて言った。

「グリモワール《禁書》か……」

まだそれを使おうとする奴がいるんだな」

「しかも所有者は《マギステル・マギ正義の魔法使い》」

きつと賞金首にされるわねえ。フッフ」

他人事のように笑っている。

いつもこう、遠まわしに言ってくる。

逝識は立ち上がり、ソファにあるYシャツを着る。

「グリモワール《禁書》回収手伝いましょう」

その間に、少しばかりお願いしたいことがかなりあります」

「何？ゆきのこと？それなら受けるけど、それ以外は内容によるわよ」

メタルフレームのメガネをかける。黒いコートを羽織る。

ポケットを探り持ち物を確認する。
戦闘に使えるものはしっかり揃っている。銃の弾が足りるかが微妙だ。

「俺が戻るまでに、幸織に魔法を教えて魔力をコントロールできるようにしてください。」

それと、ゆきは今、幸織です。おまけに師匠の事は覚えていません。もう一つ、学園長に学園を少しばかり破壊すると伝えて置いてください」

窓から外を見て、人が居ないのを確認する。
靴を履いてそのまま外へ飛び降りた。

「・・・ゆきちゃんに何が遭ったのかしら。
まあ、どうするにしろ、頼まれたならやるしかないじゃない。
弟子を取ってるのは伊達じゃないわよ」

オペラハットをつけて扉から外に出た。
その顔は不気味であって美しく、不快に思えても魅了される笑顔であつた。

森の中、小さな小屋にそれはあつた。
これは運命だと思う。

これを使って悪を全て消せと言う神の意思なのだろう。
伝説と思われていた本。魔力を増やしたり、本に書いている内容が

現実になつたりする本。

グリモワール
《禁書》がそこにあつた。

仲間達はこれを見て、奪い合っていた。

マジステル・マギ
《正義の魔法使い》として本をとり、悪となった仲間を消した。

ダーク・エヴァンジェル
これは本物だ。これで《闇の福音》を消せる。

死んでいることになっていたが、この麻帆良で生き長らえていたらしい。

この俺が奴を殺し、英雄になるんだ！

「ふ、ふふふ、ハーツハハハハハハ！！！」

これからのことを考えると笑わずに居られず、その場で高笑いした。しかし、それもすぐに止まる。

物音、草を掻き分けて誰かが来る。

この場所には魔力を持った者しか入れないはず、敵の可能性が高い。しかも、今は夜。こんなところを夜にうろつく奴なんていない。敵しかない。

音のする方向から黒いコートの男が出て来た。特徴的なところが特に無い。

「止まれ！何物だ！」

大声で怒鳴り、男の歩みを止めようとしたが、止まることは無かった

「おい！聞こえているのか！」

男は止まらなかった。

仕方なく魔法の矢を一発撃った。だが、矢は当たる直前で霧のように散った。

「なっ!？」

驚いたが、男はそれで止まった。
俺を見て、本を見て、俺を見て言った。

「異常現象怪異対策局局長代理、グリモワール《禁書》管理課課長、キサキユキシ木崎幸示。
グリモワール《禁書》不法所持、無免許使用、殺人、殺人未遂、窃盗のため、逮捕します。
それを拒否する場合、抵抗する場合、あなたの存在そのものを消します」

それを聞いたとき、不意に笑ってしまった。

今の俺を捕まえる? そんなこと出来るはずが無い。殺すなんて馬鹿じゃないのか?

俺には本がある。それに俺は《正義の魔法使い》マギステル・マギだ。
捕まえられるはずが無い。

きつとこいつは悪なのだろう。消さねばならない。

こんな奴如きに本を使う必要は無いだろう。

《正義の魔法使い》の力をみせてやる!

「光の精霊15柱、集い来たりて」敵を射て。」「魔法の射手・連弾・15矢」

魔法の射手が飛んできた。

予想通りだ。大抵、そこらの魔法使いは短気だ。
攻撃してきたし、お仕事しましょうか。

「確認しました。情報処理班は彼の親族との関係を割り出し、必要がある場合、暗殺、もしくは事故死として処理をお願いします。チーム蝙蝠、狼は作戦開始」

《情報処理班、了解》

《チーム蝙蝠い、了解しましたあ》

《チーム狼、了解した》

そんな応答で大丈夫なのか？

彼らの性格上そうなる。仕事はしっかりしているので問題ない。

こんな報告する暇あるのかというと、無いように有る。

ちよつとした特異体質で自分に害なす魔力物質、魔法攻撃を吸収する。

今は魔力補給中みたいだな。すぐ気づかれて物理戦になるけど。

「くっ『風精召喚・剣を執る戦友』『行け』」

まだ魔法攻撃を続けるそうです。

タネが割れる前にささと仕掛けるとしよう。

「アリスと兎は夢の中。

狼が来て兎を食べた。

赤い月は見下し笑う。

町の皆も一緒に笑う。

アリスの口に兎の生き血。

『兎と小さな狼少女』」

矢が当たる直前、逝識の影から赤い頭巾を首にかけた茶髪の人狼がでてきて矢を弾く。

手に持つ鉈は彼女の身長より大きく、尻尾はパタパタと忙しそうに

動いている。

「なっはあーい！サニーちゃんとあーじょあーい！！！」

少女は出て来て一番にそう言った。

逝識は笑顔を保っていた。目の前の男はただ呆然としていた。

「久しぶりだね！ゆっきー！！！！どれくらい前だっけ？出てきたの！
5年？9年？13年？きゃはー！心の壁〓時間みたいな！？さびし
ー！！！」

ハイテンションで早口で言う。

鉦を振り回し、尻尾を動かし、喜びを表す。

逝識はしゃがんで少女との視点を合わせる。

「サニー。今日は食事のために呼んだんだよ。

早くしないとウサギさんが気づいて逃げてしまうよ？」

サニーの耳がピンとたち、辺りを見回して兎を探す。

「兎はどれ！？サニーのどれ！？」

キラキラと目を光らせて逝識に聞く。

笑顔のまま男を見て言う。

「あの本を持ってるおじさんだよ。

気をつけてね。おじさんは手強いと思うから」

「うん！あつ本は？」

「綺麗な状態にしてね。

血はつけちゃだめ。もちろん傷も」

「はあゝい！」

それじゃあおじさん！君は兎だから、大人しくサニーに食べられて
いつてね！！！！」

サニーと《正義の魔法使い》が戦っている間に他の《禁書》の場所
を確認する。

じつと見て通信機を持つ。

「こちら木崎、チーム山猫、応答せよ」

《・・・こちら山猫、セブンス。用件どうぞ》

女性の声が通信機から出てくる。場所と冊数を確認しながら話す。

「時計塔に2冊、図書館島に5冊、地下に3冊、《禁書》を回収し
て来い。」

一般人以外で抵抗するのであれば危害は加えていい。

一般人が《禁書》を使った場合は《消却偽憶》ロタリーキルンを使って良い。

必ず全て回収すること。最も多く回収した者には1週間の休暇を与
える」

《山猫、了解。5分くらいで終わらせます》

「回収した《禁書》は直接俺に持って来い。」

そうじゃなかったら休暇の話は無しだ」

《セブンス、了解した》

そういつて通信を切る。

サニーのほうを見ると、そこには多くのクレーター。木はボロボロ
になって折れている。

しかし、それをやった張本人はそこに居なかった。

《報告う、人狼とターゲットが交戦中う。》

本も使用されてますねえ、どうしますー？」

「蝙蝠は魔法阻害を。狼は隙が出た瞬間を狙って本を回収。人狼はターゲットを食ったら帰るから放置すること」

《蝙蝠、りょうかい》

《狼、了解した》

そのまま通信を切り、影から一冊の本を出す。

表紙は真っ白、煙のようにうす灰色の帯がある。

裏は真っ黒、灰色で真っ直ぐな線が二本、中心で重なっていた。表裏一体の書。

対策局の人間はそう呼ぶ本。

本来の名前は、

「『陰陽怪書・日ノ輪』」

パンツと弾ける音がすると両手の上で開き、勝手にページがめくれる。

そしてめくれるのが止まると、文字が宙に浮き、般若の形を模した。

「カゴメカゴメ・ツミビト」

般若はそう言って本に戻る。

勝手に閉まったかと思うと、本は半分白く、半分黒い、奇妙な大鎌に形を変えた。

少し振り回し、逝識は暗い森を歩き出した。

オペラハットの女性は学園長室で紅茶を飲んでいた。
彼女の周りには気絶した魔法使いたちがいる。

「うふふ、私を出し抜こうなんて、お馬鹿ですね。

私は自由に生き抜いた魔女ですよ？

簡単に手札を出したりしませんよ。

あえて言いますよ。的が多すぎです。リフレク・シヨットなんてされたら一気に攻め落とされますよ。

後、うぬばれ過ぎです。

うぬばれは自分への慰めや自信をつけますが、度が過ぎると破滅にしか導きません。

ダーク・エヴァンジェル

《闇の福音》を手駒に出来たからといって、魔女を甘く見てはなりませんわよ」

「うむむ・・・」

麻帆良学園学園長、近衛近右衛門はうなり声を上げる。

彼女が言い終わる前に記憶を除こうとした。

しかし、どうやっても見ることが出来ない。

代わりに別の魔法使いの記憶を覗かせられている。

「ワタクシもシゴトなんですよ。

これ以上抵抗するなら、ただでは済みません事よ？」

彼女の緑の瞳は金に変わった。

窓ガラスに輝ができる。

「早く結論を出しなさい。

《禁書》を取るか。その身を取るか。

《禁書》を取るなら、こちらも容赦しないわ」

彼女は学園長を睨み、脅す。

少し渋ったが、棚から《禁書》を出した。

「そうよね。財産なんて、命あつての物よね。
物分かりが良くて助かるわ」

瞳も緑に戻り、ガラスの輝も消えていく。
本を手にしてオペラハットに入れる。
いつものように笑いながら扉に向かう。
ふと思い出したように扉の前で止まる。

「麻帆良の《禁書》はすべて回収させてもらいます。
使いたければ免許でも取ってみればどうです？きつと無理でしょう
けど」

足先から金の蝶になる。

大小関係なく散ってゆく。

残った魔法使いたちはただ眠る事しか出来ない。

「ゆきちゃんはいいい子にして待っているかしら。うふふ」

異常現象怪異対策局、地下5階、デッドライティングリモワール《禁忌異端書》管理室。
逝識は大鎌を振り回し、人を追っていた。

「ひつやめ——」

「うわあああああああ！！！」

「ゆっ許してくれ！頼む！」

次々と死んでゆく罪人たち。

ここにいるのは侵入者のみ。

ほとんどが《禁書》^{カルテ} 目当てで来た者達だ。

地下1階の《術書》^{カルテ} なら奪いに来て、見つかったても、助かったかもしれない。

しかし、地下2階からは侵入者は皆殺しとされている。

《禁書》には麻薬のように副作用がある。

近づいただけでも副作用が出る可能性もある。

《禁書》は免疫があるものにしか使えないということになっている。

しかし、侵入者を狩っている逝識は免疫はない。

しかし、使っているのは《禁書》。

偶にいるのだ。逝識のような《魔書》^{ギルティ} に好かれた者が。

対策局はそれを《図書館》^{キバー} と呼んでいる。

対策局に《図書館》^{キバー} は侵入者の排除を仕事にしている。人数は7人。逝識も加えて7人だ。

「・・・終わった。」

こちら木崎イ。侵入者の排除完了。人数は5人。他、1階に2人、3階に1人、4階に9人。6階扉、ピッキングされた形跡あり。開けられてはいないようです。

《術書》^{カルテ} が4冊無くなっています。どうしやすか？」

「コチラ対策本部、《術書》^{カルテ} はマフィアと魔法使いに奪われた。情報を与える。追え」

「《禁書》^{グリモワール} の使用許可おくれ」

「許可する」

「追いまーす」

通信機を切り、大鎌を担いでボーツと宙を見ていた。
ふと何を思ったのか携帯を出した。

幸織からのメールが5件。1時間ほど空いている。

一応メールを返して3日ほど離れることを伝える。そしてふらりと
体がゆれたかと思うと、そこに逝識の姿はなくなっていた。

八つ（後書き）

話に出てた《禁書》グリモワールの説明。

魔道書です。Wikiとかで探してみるといいかもしれません。

能力の強さで分けています。

弱い順に出していくと、

カルデ
術書
マテリアル
呪書
ギルティ
魔書
バイオカルデ
異端書
デッドライングリモワール
禁忌異端書
アウトマテリアル
怪異書
ワンダー
異界書
ファントム
幻想書
バンドラ
夢幻書
ユートピア
夢現禁書

といったところです。

グリモワール
まとめて禁書としています。

逝識くんは異常現象怪異対策局局長代理、《禁書》グリモワール管理課課長と言
っています、両方担っているという事です。
人手不足なんですよwww管理課はwww

後、オペラハットの女性は次に名前が出る予定です。

はつきり言えば、名前考えていません！

逝識君たちの師匠的のが居たらとか、主人公が最強なんて、在り来たりだなんて思って、突発的に、やっちまいました！！！！後悔はしていない！

まあ、そんな感じで、また1ヶ月後にお会いいたしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0863t/>

人類最幸の麻帆良日記

2011年9月20日17時45分発行